

抽象の効果―「時間」「花」「死」：抽象を生かす―

三沢 左右

・はじめに

「抽象：事物または表象の側面・性質を抽き離して把握する心的作用。(後略)」(広辞苑 第五版)

冒頭から「抽象」の定義を見てみた。抽象とはすなわち「正岡子規」「与謝野晶子」「若山牧水」などをひとまとめに「歌人」と認識するといった作用で、対義語は「具体」だ。

もちろん、抽象か具体かは他の語との関係で決まるものであり、たとえば「桜」の語は「八重桜」「山桜」に比べれば抽象的だが、「花」「木」に比べれば具体的でもある。本論では、筆者の恣意的な基準による「抽象」の判定が入ることを許された。

*

作歌においてよくなされるアドバイスに「具体を入れよ」というものがある。一首に具体が入ると、作者の体験とそれに伴う実感や感動がより確かな手触りを持つことが多いのは確かだ。抽象的な「善／悪」よりもそれらを感じさせる具体的な行動を。「心」よりもその揺らぎをこまやかに捉えた言葉を。「花」「動物」よりもその姿が想像される固有名詞を入れよ。こうしたアドバイスを受ける中で、抽象を避けるよう

になった人もあるかもしれない。

しかし、抽象を効果的に用いることで、短歌作品に新たな切り口、新たな魅力を生み出すことも可能ではないだろうか。以下で、短歌における抽象の効果について、いくつかの観点を挙げながら考察したい。

・その一 具体を想像させる抽象

ごく浅い長方形の湖が向かいの家の屋根に
あらわる 嶋稟太郎『羽と風鈴』

このごろは閻魔帳とは呼ばれなく、他人事
ばかり書いてあるコレ 大松達知『ばんじろう』
この店のウエットティッシュしょぼくなる
こうして日本しょぼくなりゆく

一首目、嶋は日常の丁寧な観察とシャープな言葉による抑制された歌風が特徴だが、この一首ではさらに抽象を効かせている。「長方形」という幾何学的な抽象語に、読者は「何のことだろう」と考えさせられる。ソーラーパネルに映った空だろうか。「ごく浅い」という簡潔な描写も効果的で、具体的な景がより鮮やかな印象として浮かび上がる。

二首目、教員ならではのアイテムが詠まれる大松作品。

「他人事」は抽象的だが、生徒たちとの距離感がよく伝わってくる。指示語を「抽象」と呼べるかは難しいが、手の中の「コレ」も、詳しい中身が描写されていないのに、存在感は大きい。抽象的な表現が実景と実感を驚くほど具体的に想像させる作品だ。三首目も大松の作品だが、一読して「自分も同じように感じていた!」と思った読者は多いのではないだろうか。「この店」も「こうして」も、具体性を排除したことで、逆に読者の具体的な体験や実感に結びつき、リアリティを増す。指示語は、うかつに使うと前提を共有していない読者が置いてけぼりになるため、短歌では禁じ手に思われるが、巧みに使われた指示語からは、作者だけのものではあつたはずの「今、ここ」が読者の前に立ち上がる。

作者の見たものと感じたことを読者に伝えるには具体が有効なのはもちろんである。しかし、抽象によっても同じ効果を生むことは可能であり、ひいては具体的な景に対して「どのように抽象化しているか」「何を見出したか」という、作者ならではの視点を深く鑑賞させる効果を強めることもできるのだ。

・その二 歌を広げる抽象

もつとあなたは積極すべき。そんなゼリー
みたいなジャムじゃなくてさ

千種創一『千夜曳糞』

きのふまで孫と遊びし公園で時間とあそぶ

一月四日

小島ゆかり『はるかなる虹』

ねむる猫をわが見るやうに眠るわれを猫が

みてゐる楕円の春夜

一首目、千種作品持ち前の、身軽でドライな抒情が光る。「積極」という抽象語の使い方に河野裕子の〈青林橋与へしことを唯一の積極として別れ来にけり〉を思い出す。「あなた」の人物像も「積極」の内容も判然とせず、下の句を事実と受け取るか象徴と取るかで解釈は大きく変わるだろう。しかし、「そんなゼリーみたいなジャム」という具体への軽やかな飛躍が「積極」のイメージを広げる。例えばここで「積極」の内容を子細に描写しても「あなた」と共有する空気の感触まで読者に伝えることはできないだろう。

二首目、「時間」という抽象語が印象的な小島作品。具体的にどのように過ごしたかを詠まないことで、そこに流れた「時間」の内情、さらには作者の心を深く読ませる。三首目、「楕円」はなかなか思いつかない語だ。飼う猫への愛情にあふれた微笑ましい一首だが、ささやかな日常を詠みながらも、確な抽象語が一首を「人間の存在」や「世界のかげがえのなさ」という本質的なテーマにまで深める。初、二句と三、四句を対句で小さくまとめたからの緩急も効果的だ。

・その三 内面へ向かう抽象

「その一」と逆に、実景を示す方向ではなく、「内面」に向かう抽象もある。抽象化されたイメージが、他者に見える具体的な外界ではなく作者の思想や感情を表現するのだ。

いま発ちて頭上をゆける鴨の腹ふりあふぐ

ときいのちは深し

小島ゆかり『はるかなる虹』

舌先に吸うソーダ水

こんなにもあなたの

なかの木が見えるのに 大森静佳『ヘクタール』
てのひらはやすやすと背景になるタマムシ
の死をひとつ載せれば

名を持つてしまつた君が名を持たぬ花を掲
げて その燃える赤 藪内亮輔『心臓の風化』

いきないか、咲きながら散るゆきたちを花
だと誤認して生きないか

君は君のやり方で死ぬ冬の樹は雪の花弁に
覆はれて咲く

一首目。「いのちは深し」に実感がこもる。「いのち」は大
きな抽象語であり、大きな把握は一首を浮足立たせることも
多いが、この歌は上空へ飛び立つ鴨という具体を心の動きの
起点に置いたことで一首全体に手触りが生まれ、空の深みで
ある地上に立つ作者自身の「いのち」の存在感がくきやかに
表現される。ここでの「深し」は、空から地上への空間的な
深さと、人間の存在自体の深さ、ふたつを同時に内包してい
るのだろう。

二首目、「木」は大森作品によく登場するモチーフだ。「銀
杏」などの固有名詞ではなく「木」と抽象的に表現すること
で、太く立ちあがるイメージ、泰然と枝葉をそよがせるイメ
ージ、物静かで、どこか悲しみも湛えたイメージが表現され
る。「ソーダ水」という具体に触れる身体を描写したことで、
そこにありながら触れることのできない「内面」が強く印象
付けられる。三首目、たとえば「死骸」と詠むとタマムシの
外形の即物的なイメージにとどまって小さくなりかねない一

首が、「死」と抽象化することで作者の心の揺らぎに焦点が
当たり、生命への感傷がこもる。

四〜六首目。「花」は藪内作品に頻出のモチーフのひとつ
だ。四首目では「名」に縛られた人間が、抽象化された純粋
な存在である花に対比される。花の自立した実在感の前に、
人間はモノトーンの背景となるのだ。ここに具体的な花の名
を入れては歌の主題が台無しになるだろう。歌集の中で連続
する五、六首目にも「花」が登場する。雪の見立てではある
が、散る花を詠みながら「いきないか」と言い、咲く花を詠
みながら「死ぬ」と言う分裂したイメージが内心の揺らぎを
鮮やかに示す。「花」は作者にとつて、死と生を繋ぐイメー
ジなのだろう。藪内の歌集には全体に「死」というテーマが
横たわる。「生きているからこそ死を恐れる」。ある意味で当
たり前の、ある意味で人間にとつて最重要の事実を、詩に昇
華した一冊である。

・詩的操作―「抽象」を生かすために

ここまで抽象の効果について述べてきたが、無批判に抽象
的な語を詠み込んでも、大掴みで粗い歌になるだけであるの
はもちろんだ。巧みな作者は、抽象を最大限に生かすために、
こまやかな詩的操作を行う。

その骨がしだいしだいに骨となるひととき
は幕間のごとし 大松達知『ばんじろう』

もう一度きり瞬いて花びらを、せめて香り
を抱きとめて ゆけ

井上法子『すべてのひかりのために』

揚雲雀あふれてやまぬ感情をあなたはほく
に見せびらかして

ひとつたひ輪郭のみに語られる死を（つま
り詩を）聴いて芍薬 藪内亮輔「心臓の風化」

一首目、「骨」^{ほね}、「骨」^{こつ}の端的な表記で歌を立ち上げる。物質的な具体を離れ、同じ一字のルビの変化のみで心理的な概念の変化を描写する。抽象の核心、といった趣だ。「父の死を悼む」という歌集全体の主題に触れてきた読者は、さらに深い感銘を受ける。しかし、「ただ気の利いた歌」で終わらせない工夫がある。「幕間」^{アンタクト}の一語は表記面と抒情面でも完成度を高めている。また、ルビの振られたこれら三カ所以外が全て平仮名な点にもこまやかな気配りが感じられる。

二、三首目、井上は詩的な抽象を多用するが、そうした語が上滑りしないように、句読点や一字空け、句割れや句またがりを駆使して一首のリズムを揺らす。二首目、「もう一度」という初句で読者の意表を突き、呼びかけとも独白とも見える結句の命令形「ゆけ」で読者の感情に波紋を広げる。三首目は語句の接続が面白い。「揚雲雀」↓「あふれてやまぬ」、「あふれてやまぬ」↓「感情」と、それぞれの語句は切れ目が判然としないが、おそらくは語句のかかり方に意図的に多重性を持たせたのだろう。抽象的な「感情」に一首を始させずに、歌のスケールを広げている。また、「ア」の頭韻も面白い響きを作っている。ところで、井上には助詞で終わる歌が多い。言いさしや倒置を駆使し、歌を終止形で完結させないことで、一首単位を超えた前後の歌との響き合いが

生まれる。美しい詩語が印象的な井上作品だが、歌の背後の具象に頼らず、言葉そのものをいかに力強く、広がりを持つように見せるかに力点を置く潔さが魅力だ。

四首目。先に見たように、藪内も連作や歌集全体で語やモチーフを響き合わせて一冊の基調を作り上げる歌人であるが、もう一つの特徴に、言葉遊び的な連想がある。ここでは「シ」の音の共有を起点に「死」と「詩」を結び付ける。主題の共有は「抽象」の特徴のひとつだが、こうした抽象の働きを、ただの遊戯に終わらない切実さで詠み上げるところに藪内の言葉への真摯さが見える。

詩精神にあふれる様々な作品に触れることは、詩の鑑賞の喜びのひとつである。

・おわりに

いくつかの観点から、短歌における抽象の効果を考察してきた。注意したいのは、これらの観点が一首の中に別個に存在しているわけではないことだ。ひとつの抽象が、具体を指し示すと同時に内面の深みを表現し、詩的にも昇華されていることは十分にある。漫然と置かれた抽象は一首を平凡なものにしてしまうことは肝に銘じなければならない。私たちは、読者として抽象を楽しむ感受性を育みつつ、同時に作者としても、自身が抽象的な語を用いる際には「抽象がどのように短歌に寄与するのか」「よりよい見せ方はないか」を常に考え、抽象を一首の核となるべく工夫を凝らす意識を持たなければならぬ。